

No	提 案 名	提案団体名	
		代表者氏名	所 属
5	宇都宮市における都市農村交流の推進と もう一つの豊かさづくり提案	宇都宮大学 教育学部総合人間形成課程プロジェクト研究	
		武田 龍之介	宇都宮大学 教育学部
		指導教員 氏 名	高橋 俊守

1 提案の要旨

50万人を超える人口を有し、中核市に指定された宇都宮市は、中心部に市街地が発展する一方で、郊外には里山や農地をバランス良く併せ持っている。本提案ではこうした宇都宮市の特性を生かして、都市と農村の交流を促進する施策を展開し、宇都宮市の新たな魅力や、もう一つの豊かさを創出することを目標とした。

この提案は、宇都宮市中心部から約8km、車で20分程に位置する、宇都宮市大谷町互作地区をフィールドとした、私たちの実践活動をもとに検討されている。私たちは、地元の農家からおおよそ14アールの圃場を借り受け、自治会の理解と協力をいただき、平成27年度から2カ年にわたって圃場に通うとともに、様々な地域交流活動を実践してきた。春の祭礼とお花見、野菜の種まき、苗の植え付け、夏の地蔵尊祭礼と伝統行事への参加、初めての収穫、収穫祭をかねた地区交流会の開催、秋の地区運動会への参加、冬の宇都宮市農林業祭への出店、地域木材資源を用いた四阿の建設、地域カレンダーの作成、年明けのどんど焼きなど、2年間で様々な地域活動や伝統行事に参加する機会をいただき、互作地区には様々な魅力があることを学んだ。これらの活動には、平成27年度16名、平成28年度17名の2年生から4年生の学生と教員1名が、宇都宮大学教育学部人間形成課程におけるプロジェクト研究という授業の一環として参加した。

互作地区は、大谷石の産地として石材産業が盛んな土地柄で、採掘跡や人車軌道跡も各所に見られ、往事の名残を留めている。一方で、農地や放棄地も広がっており、若者が少なく、また外部との交流も限られていることを感じた。平成27年度に実施した地区住民への聞き取りによると、地域の自然や暮らしに愛着を持ちながらも、高齢化による地区行事の継承や、地域外との交流の少なさに課題を感じている方が多かった。一方で大学内や市街地においても、互作地区の自然・文化的地域資源の魅力があまり知られていないことを実感した。

以上の活動を通じて、私たちは互作地区にいくつかの地域課題、すなわち、若者が行き来する活気あるまちにすること、イベントなどを積極的に行い外部との交流を増やすこと、地域資源の魅力を多くの人に知ってもらうことといった、課題を見出した。そして、これらの地域課題解決につながる一つの方法として、若者や子どもたちに野菜収穫などを体験させる「農業体験ツアー」を実施することが考えられた。

そこでここでは、都市農村交流に資する体験型ツーリズムを実施展開することによって、都市と農村が共存した宇都宮市の新たな魅力づくりや、都市と農村双方にとってもう一つの豊かさを創り出してゆくような施策事業を提案したい。本提案が、何よりもこの2年間にわたってお世話になった互作地区の皆様からご支持いただけることを願っている。

2 提案の目標

宇都宮市は、人口 50 万を超える中核市でありながら、郊外に良好な環境を併せ持っている。豊かで持続可能な未来のまちづくりに向けて、里山や農地における地域資源を掘り起こし、有効活用するためのプロセスを確立することで、宇都宮市の新たな魅力やもう一つの豊かさを創造することが目標となる。

このためには、都市と農村の地域的な連携を図る施策事業を創意工夫して実現することが大切となる。本提案では体験型ツーリズムの一つである「農業体験ツアー」に着目する。この農業体験ツアーでは、①都市と農村をつなぐ機会を提供すること、②とりわけ都市の子どもや若者の体験交流活動によって地域に活力を創出することを目指す。

農業体験ツアーには、私たちが互作地区で 2 年間の活動で得た経験をもとに、年間を通じて様々な活動を組み込むことができると考えられる。もちろんその他の地区においても地域資源に応じて応用することができると思われる。より具体的には、農家の支援をいただいた畑の耕作や、農家の畑を利用した野菜の収穫体験が考えられる。この他にも、野菜の苗や種の植え付け作業など、市街地ではできない「土に触れる」機会をつくる。子どもが参加する場合、親も同伴してもらうことで参加者が増え、交流が進んで地域への理解が一層深まることが期待される。

この施策事業で重要なことは、地域外の参加者が加わり、実際に地域で農業を体験する機会を創出することである。地域で農業を体験することで、食育や地産地消への理解が深まるとともに、地域の魅力を知り、郷土愛の醸成にも役立つからである。実際に、私たちが一年以上互作地区で畑作業をして、農業の大変さを知ったと同時に、野菜がうまく育った時の喜びや、収穫の楽しさを味わうことができた。こうした実感は、実際に農業を一部でも体験しないと分からないことから、私たちは、体験を通じて多くの人に知ってもらうことが重要だと思っている。

さらに、宇都宮市内にあっても、地区によってはすでに少子高齢化や人口減少に直面しており、伝統行事の維持や地区の将来に不安を感じている住民がいることにも目を向けたい。農業体験ツアーに子どもや若者が参加することで、地域のお年寄りとの共同作業を実現させ、地域に若者がいる活気のある状態を創り出すことも、本提案の大きな目標となる。

3 現状の分析と課題

図 1 に、地理情報システム（GIS）を用いて作成した宇都宮市の土地利用図（2012）を示す。この図で色の薄いところは、田・畑・山林を示し、色の濃いところはこれら以外の都市的土地利用（住宅用地、工業用地、商業用地、公共用地）を示している。この図で分かるように、宇都宮市は中心部に市街地が見られる一方で、郊外にはまとまった田・畑・山林（本提案書では農地・里山とした）が分布している。本提案の構想を練った宇都宮市大谷町の互作地区は図中に記号で示してあり、市中心部からおおよそ 8km、車で 20 分程度に位置している。市街地からほど近く、将来的には近隣にある東北自動車道大谷パーキングにスマートインターチェンジが作られる予定もあり、アクセスは良い。



図 1 宇都宮市の土地利用図（2012） 色の薄いところは農地・里山、色の濃いところは都市的土地利用がなされた地域であることを示す。

市中心部からほど近く、交通の利便性も高いが、互作地区では高齢化が進んでおり、少子化も顕著で子どもや若者が少ない。平成 27 年度に地区住民を対象に実施したアンケートや聞き取り調査においても、地区の高齢化を地域の心配材料としてあげる方が多く、若い人が地区を訪れることを望んでいる声があった。少子高齢化は、すでに互作地区に地域の伝統的な営みの維持を困難にさせるなど、現実的な課題を生じさせていた。以下にどんど焼きとお地藏さん祭りを事例に示す。

どんど焼き（どんと焼き、だんだん焼き等とも言われることがある）は、主に竹を切って櫓（各地で様々な呼称で呼ばれるようだが、ここでは単に櫓であった）を高く組み、正月飾りやだるまなどを添えて燃やし、一年間の無病息災を祈る、小正月の風物詩である。どんど焼きには櫓を組む「男手」と、集落の各班からの「炊き出し」がつきものであったが、高齢化によって特に力仕事を伴う作業を維持することが困難になりつつあることを知った。また、どんど焼きでは枝に刺した団子を火にあぶり、これを食べると無病息災になると言い伝えられ、子どもも楽しみとしていたが、今日では参加する子どもが減っている。なお、学生の中でどんど焼きの経験がある者は16名中3名で5分の1以下であり（平成27年度）、大部分は経験したことがなかった。

また一方で、互作地区には、かつての村の出入り口に地蔵が祭られており、子育て地蔵として古くから村人の崇敬を集めてきた。地蔵の隣には、江戸時代に建てられた十九夜碑も2塔見られ、その一方は安政2年（1855年）の年号が読み取れる。これは子安講とも言われ、安産や子授けを祈願した村の女性による集まりや信仰の名残であるようだ。毎年7月に実施される地蔵尊祭礼は、村総出で行う祭りとして営まれ、かつては転出した親族もこの日には里帰りすることが普通であったという。この祭りではあわせて、長い数珠を手にはずして、「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えながら回し、無病息災を願う祈祷が行われている。この数珠回しの担い手はかつては子どもであったというが、現在は経験のある高齢者が中心となっている。また、この祭りに際して、地区の入り口東西南北4カ所と中心の地蔵に大きなわらじと魔除けの札がかけられる。このための準備作業では、わらじ編みは男、地蔵の前掛けは女の仕事であったそうだが、現在は老人会で比較的元気な女性を中心に準備がなされている。地区の若者は消防団に所属していて、当日の屋台の運営が行われている。屋台は子どもの楽しみを作るためであるが、訪れる子どもの減少が続いているそうである。

互作地区には、採掘跡が各所に残され、石を運び出すために用いた人車軌道跡も見られる。それぞれ、往事の大谷石産業の隆盛を感じさせるものだが、見学や地域学習には利用されていないようである。陥没の危険がある立地では土地利用を制限せざるを得ないこともあり、各地に放棄地が見られる。一方で田畑も見られるが、宇都宮市街の消費地が隣接する立地条件を備えているにもかかわらず、地区の農家は1軒のみであるということだ。農地の多くは自家消費のため、家庭菜園として営まれているそうである。

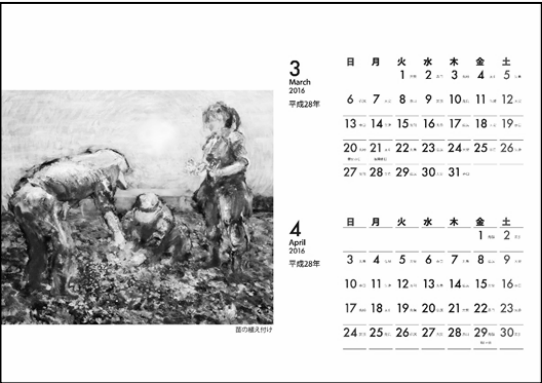
宇都宮市によると、市の農地面積は年々減少している。農家戸数を見ても、平成2年の8,647から平成26年度の4,757と減少が著しい。新規就農者も毎年20～30戸程度見られるものの、農家戸数の減少を補う程ではない。若いうちに農業を体験する機会を得ることが少なく、農業の楽しさややりがいを知らなければ、若者は農家として働くというイメージもできにくいと考えられる。実際に、私たちも農家のお手伝いを通して初めて農業を体験し農業の面白さや難しさを知ることができた。そこで、この互作地区や他の農地・里山で農業が体験できるような機会を創造し、都市部との連携を図ることができればと考える。

表1に、私たちたちが2年間にわたって互作地区で実施した主な活動の概要を、月別に整理して示した。時期によって異なるが、作物の生育期間中は1週間に1度の頻度で圃場を訪れ、畑の維持管理や農業体験活動等を実施してきた。地元の大工さんにご指導をいただき、畑作業の合間に休憩するための四阿の建設にも挑戦した。2年間の活動経験をもとに、体験型ツーリズムとして「農業体験ツアー」を提案することとした。

表1 互作地区で行った活動の概要（平成27年4月から28年11月まで）

月	活動の概要	
4月	【春の祭り】互作地区の鎮守である戸室山神社で行われている春の祭りに参加させていただいた。神饌には餅や酒に加えて、地区で採れた野菜が供えられている。この祭りは、自治会により花見もかねて行われている。地域の繁栄や実りある一年となるよう、地区の皆さんと一緒に願うことができた。	
5月	【春の農作業】自分たちの畑のお世話と、農家さんのお手伝いを行う。農家のアドバイスをいただきながら、季節の野菜などを育てて収穫した。実際に作物を育てるまでもに もいろいろやらなければならないということを知り、農家の大変さを垣間見ることができた。また、毎週互作地区を訪れることで、畑作業についての知識は勿論、地域自体についても学ぶことができた。	
6月	【こども食堂との連携】収穫した後、食べられるにも関わらず形や色が悪いなどの理由で出荷できない未利用野菜を無駄にしないために、農家側とこども食堂側との橋渡しを行い、「昭和こども食堂」さんに野菜を使ってもらえることになった。市中心部にあるこども食堂では、できるだけ地域で取れた安全な野菜を使った料理を作りたいことを希望しているため、農家との連携ができることで活動の幅を広げることができた。	
7月	【お地蔵さん祭りとその準備】お祭りには『わらじ』が魔よけとして使用されるということで、その作成からお手伝いさせて頂いた。お地蔵さんの頭巾や前掛けづくり、わらじ編みの仕方を教えてもらいながら、地域特有の料理や好きな食べ物などの話を聞く等、地元住民の方々と触れ合う良い機会となった。お祭りの参加者としては、小さい子が少ないという印象を受けた。アンケートから、地域の方々は若い人が集まることを望んでいることを知った。	

月	活動の概要
8 月	【収穫祭】自分たちで育てたナス・トマトなどを使って夏野菜カレーをつくり、お世話になっている地区の皆さんにふるまおうと収穫祭を開いた。作ったカレーを通して、一緒に食事をしながら地区の皆さんと談話するという機会を設けることができ、瓦作の人たちと交流を深めることができた。 
9 月	【農林業祭に向けての野菜作り】農林業祭への出店のため、ハウレンソウや大根などの野菜を育てた。野菜を育てるにあたって耕起や種まきなどから始めて、雑草取りや間引きを行い、収穫までを地元農家の指導のもとで行った。 
10 月	【運動会】瓦作地区の人たちと一緒に大谷地区の運動会に参加してもらい親睦を深めた。参加人数が足りないために出ることができない種目があったりした。また、若者が多い地区とそうではない地区があり、それによって種目の順位に偏りが出たりしたため、地区ごとの年齢構成にかなりの差があることを実感した。 
11 月	【宇都宮市農林業祭】自分たちが育てた野菜の入ったシチューを作り出店した。育てた野菜を加工して売り出すということは初めての経験であった。どのような料理とするのか、どうすれば人を呼び込むことができるかなど苦労もあったが、2 日間で 250 杯の売り上げが有り、充実した体験になった。写真は宇都宮市長の応援をいただいた時に撮影した 1 枚である。 

月	活動の概要	
12 月	【どんど焼き準備】瓦作地区の一大行事であるどんど焼きに向けての準備に参加した。切り出した竹を運び、枝を切り落とした状態にし、円柱状になるように竹をおく。さらに落とした枝などを竹の隙間に入れ、全体を固定する。最後に正月に使った飾り物やだるまを飾る。力作業を伴うため、お年寄りだけで作業をすることはたいへんである。一度なくなりかけた「どんど焼き」を復活させ、地域の伝統行事を共有することで、地域住民との関係をさらに深めていくことを目標とした。	
1 月	【どんど焼き】どんど焼きでは、櫓を組み、一緒にお守りやお札、だるまを燃やすことで穢れを清め、無病息災や五穀豊穡を祈ったり、正月気分を現実に戻す意味を持つという。どんど焼きにあわせて、地区のおばあちゃん達と共に、炊き出し用のけんちん汁を作った。野菜の切り方等優しく教えてもらい、和気あいあいとした雰囲気、交流を計れた。また、畑で学生が栽培したかぼちゃを使った料理（かぼちゃぜんざい）を、炊き出し当日配布した。炊き出しで使うカマドも、学生がドラム缶から作り、それを使用。料理の試行を料理班で前日まで行い、当日は地域の人々に「おいしかった」と喜んで頂けた。	
その他	【カレンダー】プロジェクトとして活動してきた記録を、絵や写真を用いてカレンダーという形でまとめた。カレンダーは実用的であり、お世話になった人々に配布して今後も利用してもらうことにより、地域の宣伝となる。カレンダーの形式は1枚に2か月分のカレンダーが記載してある2か月カレンダーにし、活動してきた瓦作の四季折々の出来事の絵や写真を利用した。絵は、プロ研メンバーである寶田さんが作成し、写真も先生やメンバーが撮影したものを利用した。どんど焼き当日、100部ほど配布することができた。地域の行事や出来事に根差したカレンダーであったため、配布先では大変好評であった。	

4 施策事業の提案

農業体験ツアー：宇都宮市の体験型ツーリズム事業として、「農業体験ツアー」を実施し、都市（特に子どもと若者）と、農村・里山の自治体の交流を促進する。これによって、宇都宮市の農業の振興、お年寄りと若者の交流機会の創出、伝統行事の維持、食育や地産地消の推進、地域理解と郷土愛の醸成を図る。

役割分担：宇都宮市は農業体験ツアーを事業化し、経費の一部を予算化する。さらに、農業体験ツアーの企画立案、体験パッケージの開発、地元農家や自治体と参加者や参加団体との連絡調整等を行、農業体験ツアーのコーディネーターを宇都宮市の各地域に配置する。

農村・里山においては、連絡担当者の配置や農業体験の準備をはじめとする受け入れ体制を整える。農業体験では、ただ農業を体験するだけではなく、収穫体験や採れた野菜で料理を作ったり食べるなど、農業を身近に感じる体験を内容に盛り込む内容とする。また、地区内の行事として営まれている祭りやどんど焼きに、地域外からの参加者を認めることなど、地区内での合意形成にも十分に配慮する。

参加者には、あらかじめ農業体験ツアーの魅力や意義を、受け入れ地区の地域資源の説明とともに十分な情報を提供する。参加者の中で特に子どもや若者については、大学においては単位化された授業の一環としての参加、中高校学校においては課外研修やクラブ活動、小学校や幼稚園・保育園等においては課外学習や収穫体験等、年齢や学年に応じた教育体験プログラムを編成すると効果的である。

実施に伴う効果：

以下のような効果が考えられる。

- ・ 都市住民に農業を体験してもらうことで、宇都宮市の農村・里山に対する関心と理解を深めることができる。
- ・ 実際の体験を通じて、農業について興味をもってもらえるとともに、宇都宮市の農村・里山を維持することの大切さを知ってもらうことができる。
- ・ 参加者が農業のやりがいや楽しさを感じる機会となれば、後継者として農業を選択する若者が出てくるかもしれない。
- ・ 日ごろの都市生活ではなかなか実感することができない、食へのありがたみを感じることができる。
- ・ 少子高齢化によって困難になりつつある、地域に伝わる伝統行事の維持を、地域外の住民を交えて検討する機会となる。
- ・ 都市と農村の交流体験によって、地域との関わりや人的交流が促進されることで、地域への理解と郷土愛が醸成される。

事業実施の課題：

本事業の実施に際しては、次のような課題が生じることも想定される。

- ・ 人を呼び込むための広報をしっかりと行わないと参加者が集まらない可能性がある。特に農業にあまり関心がないような人々を呼び込むにはどうしたらよいか考える必要がある。
- ・ 農業に関心を持ち、積極的に参加しようとする若者がどのくらいいるのか、事前の調査も求められる。
- ・ 体験ツアーを一度だけのものとせず、継続して行うための仕組みの検討とともに、予算の確保も求められるだろう。